原著論文

小学校の休憩時間における児童の集団的遊戯活動に関する基礎的研究¹

土 田 了 輔 (上越教育大学)²

Abstract

Research in the field of school students' peer group activities during recess will undoubtedly clarify many unsettled questions in the field of child development and socialization. This is especially true since children's play groups are seldom seen after school.

Group play activities during recess in elementary schools, however, have not been focused on and no framework for analysis of these groups has been formulated. Therefore, I used this study to search for a framework for detecting play activity of school students' peer group during recess at school.

A small-scale elementary school, comprised of three combined classes, was selected as a research field for the participant observation.

First, there was a question as to whether the total set of the members that was taking part in the observed play activities was regarded as one play group. Given the existence of a fixed leader, the role differentiation in the play group and the cohesiveness of the members, the observed members were regarded as one play group.

Next, the observed play group was examined from the way the peer group organized members, namely, spontaneous selectivity, equality and mobility.

The results of the analysis suggest that the play group during recess at this school can be regarded as a peer group. In some cases, however, equality between members is destroyed by the participation of teachers, analysis should be carefully executed.

Key words: recess, play activity, participant observation, socialization

キーワード：休憩時間，遊戯活動，参与観察，社会化

¹ Fundamental Study on Elementary School Students' Group Play Activities During Recess

² Ryoussuke TSUCHIDA, Joetsu University of Education, 1 Yamayashiki, Joetsu, Niigata 943-8512, Japan

1. 緒言

子どもの健全な発達を考える時、子どもを取り囲む様々な集団の影響は看過できない。特にParsons¹⁾らが指摘するように、家族集団 (family)、仲間集団 (peer group)、学校集団 (school) の3つは、子どもの社会化にとって重要な意味を持つ。なぜなら、子どもの生活は、常にこれら3つの集団の中で展開されているからである。Parsonsは、これら3つの集団を1つの社会システムとさへみなしている。

ところで、今日の子どものを取り巻く社会環境の変化について目を向ければ、平成16年度文部科学白書において、家庭での教育力の低下、都市化の進行などによる連帯感の希薄化、地域の教育力の低下とともに、自然や社会と関わった子どもの遊びの機会が減少していることなどが指摘されている。つまり、従来は家族集団、仲間集団、学校集団という3つの集団による社会化が、バランスよく機能していたのだが、今日では、前者2つがその機能を著しく低下させているのである。このような子どもを取り巻く環境の変化は、子どもの健全な発達にとって極めて深刻な事態を引き起こす可能性がある。住田が指摘するように、自発的、自然発生的な仲間集団における活動と経験は、相互に了解した価値規範に順応することを学習する、極めて重要な機会を提供するからである。この意味で仲間集団は、「児童期の子どもにとっては、生活全体を支配するほどのウェイトをもつ」²⁾のであり、仲間集団の消滅は、子どもが最も重要な学習の機会を失うことを意味する。

平成14年度からの完全学校週5日制にともない、一見、子ども達が仲間集団を形成しやすくなったとも考えられる。しかし、実際は、文部科学省主導の「新子どもプラン」³⁾に見られるように、大人主導の集団形成が整備される一方で、子どもの自発的、自然発生的な集団形成が促進されたという報告はない。また、住田は、

家族集団や学校集団については実証的研究が多いとしながら、「仲間集団については、多くの研究者によって、その重要性が繰り返し指摘されているにもかかわらず、実証的データにもとづいた分析は極めて少ない」⁴⁾としている。しかし、子ども達が、仲間集団で活動をする機会を全く喪失してしまっている、と考えるのは早計である。手掛かりは、仲間集団の特徴である、自発的選択性、対等性、流動性というキーワードである⁵⁾。自発的選択性とは、自分の興味や関心に基づいて、集団に加わるかどうかを選択できる、ということである。対等性とは、メンバー相互に社会的勢力の差がないということである。流動性とは、集団のメンバーが、いつも固定しているわけではなく、参加者の自由意思に基づき、メンバーが変動することを指す。

上記の特徴をもつような集団として、昼休みを含む、学校の休憩時間の遊戯集団に着目したい。厳密に言う、学校の中で形成されるあらゆる集団は、教師の指導、管理の下におかれ、学級や学年を単位として活動が制限されるなど、仲間集団とは区別されるのである⁶⁾。しかし、近年は小学校教諭の業務が大変多忙になっており、今回調査したK小学校のように、休憩時間の集団的遊戯活動に教師が毎回参加するような例は、少なくなっているとも考えられる⁷⁾ので、皮肉なことに、小学校の休憩時間中に、メンバー相互の関係が対等な遊戯集団が発生しやすくなっているとも言える。

そこで、本論は、近隣での仲間集団形成が困難になっている今日、学校という限定された場とはいえ、休憩時間に発生する遊戯集団が、現代的な子どもの社会化や健全な発達を促進する可能性を持つかどうかを実証的に検討するものである。その際に、小学校の休憩時間における遊戯集団が、住田による仲間集団の条件を備えているかどうかを確認する。その上で、教諭による介入やきょうだい⁸⁾関係のメンバーの混入にも着目し、遊戯集団の質に与える影響につい

て事例的検討を行う。

2. 先行研究の検討

休憩時間の子どもの活動に関する研究の傾向を調査するために、「子ども」と「遊び」をキーワードにした研究を概観した結果、幼児を対象にした文献が散見された⁹⁾。中でも、幼児どうしの相互作用による、社会的スキルの形成に焦点を当てた研究が多かった。幼児期の子どもにとって、1日の大半は遊びであるから、その遊びの中における発達の視座の研究がなされることは当然と言える。

一方、児童期の子どもについては、遊びと社会性に対しての重要性は指摘されているものの¹⁰⁾、上述したとおり実証的研究は少ない。その中で渡辺ら¹¹⁾は、子どもの遊び能力と、向社会的行動能力、社会的スキルのそれぞれに相関関係を見出し、学校現場における遊びの保障を提案している。しかし、渡辺らは、現実に生起していた遊びの実態を想定しておらず、子ども達がどのような遊び場面を想定して質問紙に回答したかについて疑問が残る。山崎ら¹²⁾は、遊びの内容に関して、小学校3年生から6年生を対象とし、子どもの遊びと運動に関する調査を行っている。この調査は、男子児童が女子児童に比較して、運動に対する愛好度が高いことを明らかにしているが、運動、スポーツというキーワードが出てきても、それ以上に具体的な活動の内容に言及するものではなく、子どもの遊び、運動、スポーツに対する意識や活動実態を把握する基礎的な研究にとどまっている。横山¹³⁾は、小学生の遊びと友人観について調査し、集団的遊びをしている子どもは、そうでない子どもより、友人関係に対する認識、態度、評価等の側面について、肯定的な友人観を有していることを明らかにしている。また、集団的遊びの中でも、サッカーや野球といった活動的遊びをしている子どものほうが、非活動的遊びをしている子どもより、認識や態度面において、より肯定

的な友人観を有していることも指摘している。横山の研究は、渡辺ら、山崎らと異なり、子どもの遊びの内容を、集団的活動的遊び、集団的非活動的遊び、非集団的活動的遊び、非集団的非活動的遊びの4つに分類し、考察を行っている点が特徴的である。

住田は、「児童期の仲間集団は、典型的な遊戯集団の形態をとる」¹⁴⁾とした上で、子どもが、ある特定の集団的遊戯活動をするを目的として参集した場合を活動集団、親密な仲間との相互的活動や交渉を目的として参集した場合を交友集団と呼び、区別している¹⁵⁾。この住田の二分法は、従来の仲間集団に関する知見を批判し、子どもが、野球など特定の活動をするためには、必ずしも仲間との親密さ等、情緒的つながりを必要としないことを指摘したものである。また住田は、活動集団においては各成員の技能や知識に応じて、各成員の地位は序列化し、集団内での役割が分化化している。この研究は、集団の質に着目し、従来の仲間集団に関する知見では説明できなかった、活動の変化とメンバーの離脱等について説明を可能とした点、実際に観察される子どもの仲間集団のいくつかのバリエーションを、実態に即して説明している点等が高く評価できる。しかし、活動集団と交友集団の、実際の弁別方法は何か¹⁶⁾、また、活動集団に比して交友集団のメンバー数が少ない事例がほとんどであるため、交友集団は、単に組織化途上の活動集団であり¹⁷⁾、同じ性質の集団を、異なる発展段階で見ただけなのではないか、などの疑問も残る。

以上、子どもの遊びと社会性をキーワードに先行研究を検討すると、横山、住田らにみられたように、遊戯集団の質的側面を検討するための分析枠が散見された。

次に、本論の対象である、学校の休み時間に焦点を当てるため、「休憩時間 (recess)」, 「昼休み」をキーワードとした研究を概観した。すると、小学校の昼休みの運動場で、遊ん

でいた児童の数や、運動場内の人口密度、遊びの種類を概観した研究¹⁸⁾や、小学生のストレスと、休憩時間の過ごし方に関する研究¹⁹⁾も見られた。しかし、これら2つの研究は、集団的遊戯活動に興味を持っているものではなかった。また、子どもの健康面から活動の内容、特に有酸素運動の量に着目した研究²⁰⁾、休憩時間と子どもの認知発達、教育的な意義に着目した研究²¹⁾、休憩時間のタイミングと学級や遊びの中での子どもの活動に関する研究²²⁾、子どもの活動スタイルと仲間との関係に関する研究²³⁾、そして休憩の有無と子どもの不注意や無関心等に関する研究があった²⁴⁾。特に子どもの活動内容の分類に関して、Kraft²⁵⁾は、活動的な行動 (Active Behavior) と受動的な行動 (Passive Behavior) という大きな二分法を用い、前者の中には、ランニング等の持続的な有酸素活動 (Vigorous Activity)、ボール等の投・捕・蹴活動 (Moderate Activity)、歩行やバランスを取る動作、柔軟性を伴う活動、遊具を使った遊び (Minimal Activity) を含めている。また、後者について、社会的相互作用 (Social Interaction)、独立的行動 (Independent Behavior)、待機 (Waiting) の3つに分類している。

上記に概観してきた休憩時間 (recess) に関する研究は、大きく2つの枠組みでなされてい

る。1つは、休憩時間そのものに着目するというより、休憩時間のタイミングや活動が、その前後の授業に及ぼす影響を検討するという観点である。もう1つは、休憩時間の活動が個々の子どもの健康や発達に及ぼす影響を検討するという観点である。特に後者は、休憩時間全体の活動を量的に捉える必要があるため、活動内容が、バスケットボールや野球のように、特定のスポーツ種目にカテゴライズされるのではなく、ボールの投・捕・蹴等、個々の具体的動作が念頭に置かれている。

このように、休憩時間、昼休みをキーワードとする研究は、個人の行為を対象とした研究が中心であった。しかし、遊戯活動をしている個人が複数参集した総体、すなわち、遊戯集団を対象とした研究は見られなかった。

3. 調査対象

子どもの遊戯活動に可能な限り影響を与えずに、子どもの休憩時間を観察するために、小規模小学校であるN県J市の山間部に位置するK小学校を対象として参与観察を実施した。平成14年4月時点でのK小学校は複式3学級、児童数20名 (転出した2名は対象外とした) であった (表1)。平成15年度は6名が卒業したのに対して、中学年 (4年生) 女子児童1名が転

表1. K小学校の学年別人員構成

学 年	性 別	児 童
1 年生	男子	
	女子	R, T, U
2 年生	男子	
	女子	S
3 年生	男子	K, M
	女子	Q
4 年生	男子	B, C, *1
	女子	N, O, L
5 年生	男子	
	女子	I, J, *2
6 年生	男子	A, D, E, F, G
	女子	H

(平成14年度)

*1, *2は1学期に転出

表2. K小学校の学年別人員構成

学 年	性 別	児 童
1 年生	男子	X
	女子	V, W
2 年生	男子	
	女子	R, T, U
3 年生	男子	
	女子	S
4 年生	男子	K, M
	女子	Q, P
5 年生	男子	B, C
	女子	N, O, L
6 年生	男子	
	女子	I, J

(平成15年度)

Pは1学期に転入

入，低学年（１年生）に男子児童１名，女子児童２名が入学し，児童数18名となった（表２）。

調査期間は平成14年４月から平成15年11月までの１年７ヶ月²⁶⁾であり，調査は当初週１回，調査開始から半年過ぎた頃から週２回のペースで実施した．調査時間は昼休み（13:00～13:40）から午後の授業すべてを対象とした．午後の授業は，休憩時間の遊戯活動のメンバーが多い，５，６年の高学年クラスを対象として観察を行った．

山間部にあるK小学校の児童は，放課後に仲間集団を形成して遊戯活動を実施するには困難な生活環境にある．児童達の自宅をつなぐ生活道路は，南北に延びる起伏のある川沿いの１本道である．K小学校を挟んで「カミ（南側，川の上流地域をK小学校ではこう呼ぶ）」に約1km，反対に「シモ（北側，川の下流地域）」に，約2.5kmの範囲が学区である．平成14年度時点の６年生児童Aと４年生児童Cのきょうだいが居住する住宅は，４年生児童Bと隣接しており血縁関係もある．高学年クラス担任のe教諭（30代男性）によれば，この隣接する住宅に住む３人は，幼少期より３人がきょうだいのように育っている．しかし，K小学校の他の男子児童は，ほとんどがK小学校を挟んで「カミ」に居住している．A・C，Bの自宅から６年生Eの自宅までの距離は，地図上の直線でも約3km離れている．また，Eの自宅の比較的近くに居住しているのは，６年生男子児童F，Gである．しかし，e教諭によれば，FとGは放課後にK小学校の特定の児童と遊戯集団を形成している様子はない．FとGの放課後の交友関係が判然としない理由はわからなかったが，Gは，４年生女子児童Nときょうだいであり，未就学児のきょうだいも１名いることから，放課後は家庭内できょうだい達と過ごしていた可能性もある．EとKはきょうだいであり，住居に近いMと放課後の交友関係がある．Iは放課後の交友関係が判然としないが，学区外の書道教室やピアノ教

室に通っていたので，放課後に近隣の児童と遊ぶ時間は少なかったと考えられる．HはQ，Rときょうだいであるが，学年の近いJと近隣に居住していたこともあり，放課後に交友関係がある．この学区では，週１回程度，外部の指導者によるサッカークラブがあり，その時は児童達の多く（A，B，C，D，E，G，H，J，K，N，O，Q，R，S，T）が男女で参加している．しかし，AとB，Dは，このサッカークラブとは別に，外部指導者による野球クラブに所属している．Cは隣町の小学校にあるサッカークラブに所属している．

一方，平成15年度は，児童数減少により，放課後等に小学生だけで遊戯集団を形成することはいっそう困難になった．

このように，e教諭が休憩時間の遊戯集団のメンバーとしてあげた12名を中心に，放課後の児童の交友関係をみると，大人が関与した，いわゆる社会体育で活動する者，ピアノや書道の教室に通う者はいたが，児童どうしが仲間集団を形成するには，自宅間の距離が遠く²⁷⁾，平日の放課後に帰宅してからもう一度参集することはない．また，K小学校は，放課後，すぐに帰宅するように指導しており，放課後の校庭で，大人の関与がない，自然発生的な遊戯集団が見られることはない．

4. 研究の方法

学校内で短時間で実施されている集団的遊戯活動の実態を把握するとともに，その分析枠を検討するため，人類学や社会学で発達した参与観察法²⁸⁾（participant observation）を採用した．その際，児童²⁹⁾に必要以上に緊張感を与えないようにするため，VTR等を持ち込むことは避けた．箕浦³⁰⁾は，参与観察法の手順を，先ず，フィールドに入って（field entry）から，フィールドで出会う人との友好的な人間関係（rapport）を確立する旨，説明しており，長期の調査をするためには，調査対象となる学校全体とのコミュニケーションが重要になる．R，T，U

ら女子児童にせがまれて竹馬遊びに加わるなど、調査対象の遊戯集団以外の児童と活動する場合もあったので、毎日、必ず参加するメンバーとは、参加形態が異ならざるを得なかった。また、今回調査対象とした遊戯活動は、ベースボール型ゲームが中心であり、調査者自身は、活動メンバーの中では、同ゲームについての技能は中程度³¹⁾とみなした。なお、調査対象となったベースボール型ゲームの遊戯集団は、ほぼ毎日形成されることがわかっていた³²⁾。したがって、本論は、対象集団内における調査者の地位を、技能的には中程度メンバー、参加形態については周辺の³³⁾メンバーと想定している。

調査者は、休み時間の前後における集団的遊戯活動のメンバーとの関係等を考慮し、週2日の調査日の午後には、児童と共に机をならべ、授業にも参加した。この際、指導的立場になることは極力避け³⁴⁾、児童から質問を受けても即座に対応せず、クラス担当教諭の指示を待つよう心がけた。休憩時間中の観察メモは、観察が終了次第、場所をあらためて記録し、児童の前では記録作業をすることは避けた。観察メモに基づくフィールドノーツ³⁵⁾や本論の記載内容の正確性に関しては、受け入れ担当のe教諭に後日確認をとった。

5. 遊戯活動のメンバー構成

1) 平成14年度

K小学校では、昼休みを含めた休憩時間の集団的遊戯活動は、主に校舎に併設された体育館の中で実施されていた。平成14年4月の調査開始当初から、平成15年3月までの1年間、体育館における集団的遊戯活動は、6年生男子児童A, D, E, F, Gと女子児童H、中学年の男子児童B, Cをメンバーとしたベースボール型ゲームであった。その他の高学年女子児童、中学年児童は、体育館の空き空間で一輪車、ドッジボール、縄跳び等を実施するか、教室で過ごすこと

がほとんどであった。

e教諭は、休憩時間中の集団的遊戯活動には、ほぼ毎回参加していた。e教諭によれば、平成14年度の遊戯活動における中心的メンバーは、6年生男子児童のAをリーダー³⁶⁾とし、その他、6年生男子児童D, E, 4年生男子児童B, Cの5名であった。また、B, Cは、e教諭により遊戯活動の提案者³⁷⁾とされていた(図1参照)。

D, Eは組み分けや種目選択にリーダーシップを発揮することはなかったが、この2名はサッカー型ゲーム、ベースボール型ゲーム、双方の技能に卓越していた。D, EはAがリーダーシップを取るこの遊戯集団のメンバーとして集団形成時から、常に活動していた。また、ベースボール型ゲームの技能は、筆者が見る限りにおいて、D, E, Bの3者は、ほぼ同等であった。Cに関しても、ベースボール型ゲームの技能が、D, E, Bの3者より、著しく低いようには見えなかった。このような関係にある4者(B, C, D, E)において、どうして年齢が下のB, Cが活動の提案者になれたのかは明らかでないが、先にも述べたように、A, B, Cの3名は、幼少期より特に親密に関わりを持ちながら育っている。そのため、B, Cの2名は、D, Eを含む他のメンバーより、Aに対して気兼ねなく物事を提案できる立場にあったと考えられる。

このA, B, C, D, E以外のメンバーは、Aと同じ高学年クラスの6年生男子児童F, G, 6年生女子児童のHとEのきょうだいである3年男子児童Kであった。このF, G, H, Kは、e教諭によれば周辺のメンバーに位置づけられている。この他に、5年生I, Jと3年生Mの3名が加わるケースもあったが、これらの児童は、遊戯活動のメンバーが著しく不足したり、人数調整として呼ばれたりする機会はあっても、今回調査対象となった遊戯活動に参加することはほとんどなかった。

以上、平成14年度のK小学校における、休憩時間中の集団的遊戯活動のメンバーは、Aを

* 点線は、休憩時間の活動以外での交友範囲を表している。居住している地域にはほぼ一致している。
* () 内は学年。
* イタリック体にアンダーラインの児童は放課後サッカークラブに所属、◎の児童は少年野球クラブに所属。

図1. 平成14年度におけるK小学校の遊戯活動メンバーの関係図
(e教諭が作成した図を一部変更)

リーダーとする5名の中心的メンバーと、4名の周辺のメンバー、加えて参与観察で介入している調査者、そしてe教諭の、計11名であった。

2) 平成15年度

一方、平成15年度になると、前年度6年生の

中心的メンバーの卒業にともない、新6年生女子児童I, J, 新5年生女子児童L, 新4年生男子児童Mが周辺のメンバーとして集団に加わる。この平成15年度の中心的メンバーは、新5年生男子児童のB, C, そして新4年生男子児童のKとなった。しかし、平成15年度のK小学校におけ

る休憩時間の遊戯活動は、e教諭による教育的な配慮³⁸⁾から、ベースボール型ゲーム以外の活動も多くなった。

ベースボール型ゲームの場合は、Bがリーダーとなった³⁹⁾。B、Cは対等の関係にみえるが、Bは、学校外で少年野球チームに所属している。一方、Cは、学校外（他の学校区）のサッカーチームに所属している。したがって、ベースボール型ゲームの技能はBのほうが顕著に高い。住田は、活動集団の地位決定要因を、年齢ではなく、技能の高低としているが⁴⁰⁾、K

小学校の休憩時間中における集団的遊戯活動においても、同様の傾向がみられた。サッカー型ゲームの場合、Bの活動意欲は停滞していた⁴¹⁾のに対して、Cはリーダーシップを発揮していた。

先にも述べたように、平成15年度は、種目の選択に対してe教諭の教育的な配慮があり、攻防の際に身体接触がないソフトバレーが教諭により提案されることがあった。このソフトバレーが実施されている場合、ゲームに参加する教諭が、低学年児童に声をかけるなど、メンバー構成に教諭の意向が強く反映されていた。

表3. K小学校における遊戯活動の参加メンバー

日 付	遊戯活動	メンバー：()内は学年	
平成15年 6 月 2 日 (月)	キックベース	男	B(5), C(5), K(4), e教諭, 調査者
		女	I(6), J(6), O(5), Q(4)
平成15年 6 月 5 日 (木)	ソフトバレー	男	B(5), C(5), K(4), e教諭, 調査者
		女	I(6), J(6), N(5), L(5), s職員
平成15年 6 月 9 日 (月)	ベースボール	男	B(5), C(5), K(4), e教諭, 調査者
		女	
平成15年 6 月16日 (月)	ハンドベース	男	B(5), C(5), K(4), M(4), e教諭, 調査者
		女	J(6)
平成15年 6 月23日 (月)	ソフトバレー	男	C(6), X(1), e教諭, 調査者
		女	J(6)
平成15年 7 月 9 日 (水)	ソフトバレー	男	B(5), C(5), K(4), M(4), e教諭, h教諭, 調査者
		女	I(6), J(6), L(5), N(5), O(5), R(2), T(2), W(1), t教諭
平成15年 7 月10日 (木)	ソフトバレー	男	C(5), K(4), M(4), X(1), 調査者
		女	I(6), L(5), R(2), T(2), V(1), W(1), t教諭, s職員
平成15年 7 月15日 (火)	ハンドベース	男	B(5), C(5), K(4), M(4), e教諭, 調査者
		女	I(6), J(6)
平成15年 7 月17日 (日)	パームボール	男	K(4), 調査者
		女	I(6), J(6)
平成15年 7 月23日 (水)	サッカー	男	B(5), C(5), K(4), e教諭, 調査者
		女	I(6), J(6)
平成15年 9 月 1 日 (月)	ドッジボール	男	B(5), C(5), K(4), M(4), X(1), 調査者
		女	I(6), J(6), N(5), O(5), P(4), S(3), V(1), W(1)
平成15年 9 月 3 日 (水)	ベースボール	男	B(5), K(4), M(4), h教諭, 調査者
		女	
平成15年 9 月11日 (木)	サッカー	男	B(5), C(5), K(4), e教諭, 調査者
		女	J(6)
平成15年 9 月22日 (月)	ソフトバレー	男	X(1), 調査者
		女	L(5), R(2), V(1), W(1), o教諭, s職員
平成15年11月10日 (月)	ソフトバレー	男	B(5), C(5), K(4), X(1), e教諭, 調査者
		女	I(6), L(5), S(3)
注：ベースボール型ゲームのうち、打者がボールを足で蹴る場合はキックベース、素手で打球する場合はハンドベース、バットを使用して打球する場合はベースボールとして区別した。パームボールとは、テニスに近いネット型のゲームだが、ボールは掌で打球されていたのでこのように呼ぶこととした。			

また、攻防の身体接触がないためか、ソフトバレーが実施された場合は、低学年の男女児童がメンバーに加わるなど、集団のメンバー数が多くなることがあった（表3）。

このように、平成15年度におけるK小学校の遊戯集団の構成メンバーは、活動種目の選択によりかなりの変動があったため、特定が困難であった。しかし、平成14年度から継続しているベースボール型ゲームに焦点を当てると、5年生児童B、C、4年生児童Kが中心的メンバーと考えることができる。また、集団のリーダーは、技能と知識面から、Bとみなすことが適当と思われる。また、周辺のメンバーは、6年生児童のJ、4年生児童のM、e教諭、調査者の4名である。サッカー型ゲームの場合も、中心的メンバーはB、C、Kである。しかし、リーダーはCとなり、Mがメンバーから外れた。周辺のメンバーは、6年生児童のI、J、e教諭、調査者であった。その他の種目におけるメンバーは、先述したとおり、e教諭が中心となって参集を呼びかけているためか、メンバーが一定ではない（表3）。

6. 遊戯集団の構成

1) 活動開始時の集団形成

一般に、児童の遊び場面では、数人のメンバーが集まってからジャンケン等により集団が二分され、組み分けが決定される、という手順が見られる。しかし、K小学校の集団的遊戯活動においては、平成14、15の両年度を通じて、誰と誰がジャンケン⁴²⁾をするかという指示は、ほぼ毎回遊戯活動に参加しているリーダー格のメンバーによって決定される傾向があった⁴³⁾。メンバー構成の箇所でも述べた通り、平成14、15の両年度を通じて、年齢や性別が異なるメンバーで遊戯集団が構成されていた。そのため、技能差、体力差等を考慮した組み分けが必要となることから、参加者全員の技能差を考慮できる、リーダー格の児童（平成14年度はA、平成

15年度はBあるいはC）によるジャンケンの組み合わせが生じていたと推察される⁴⁴⁾。他の複式を採用しているN小学校でも調査を実施したが、この小学校は、高学年5、6年生クラス内ではほぼ遊戯活動を満たす人数が確保される規模のため⁴⁵⁾、ジャンケンのペアまでをリーダー格の児童が決定するという手続きは見られなかった。

以上のように、K小学校における休憩時間の遊戯活動は、遊戯集団がある程度形成された後、ジャンケンによって集団が二分され、活動が開始された。

両年度のベースボール型ゲームにおけるA、B二人のリーダーシップ発揮場面で共通している点は、自分がベースボール型ゲームの攻撃、防御、どちらでプレーしていても、ゲーム中の紛争等あらゆる局面に対する最終判断を下していたということである。つまり、K小学校のベースボール型ゲームの遊戯集団は、1つの遊戯集団として参集し、2つのチームに分かれてゲームを実施していたが、ゲーム中においても1人のリーダーを頂点した1つの遊戯集団としての性質を保持していた。

2) 活動中の集団形成

小学校の休憩時間に実施される集団的遊戯活動は、休憩時間直前の活動に影響を受ける。例えば、昼休みの場合、給食を食べるのに要する時間は、個人差がある。また、給食当番をはじめとする学級内の係活動、休憩時間を利用した教諭の個人指導等も、児童の休憩時間の制限条件となる。したがって、一定の人数が集合し、集団的遊戯活動が開始されたとしても、活動中に中途加入してくる児童は後を絶たない。小学校における休憩時間は10分から20分、昼休みであってもせいぜい40分から60分程度が一般的である。よって、次々に現れる中途加入者を受け入れる処理に時間を取られると、活動時間が大幅に削減されることになるので、この中途加入者の受け入れが、集団内での重要な役割となり

得る。この中途加入者への対処が円滑に行われない場合、活動は中断する。

中途加入者の受け入れについては、大別すると3通りのやり方があった。1つめは、中途加入者が、既に遊戯活動に参加しているメンバーに加入の意思を伝える場合、意思を伝えられたメンバーが、その中途加入者に、加入の可否と加入チームを指示するというパターンである。2つめは、加入の意思を伝えられたメンバーが加入の可否を通告するが、加入チームの指示は、別のメンバーが決定するパターンである。3つめは、中途加入者から加入の意思を伝えられても、自分では加入の可否を判断せずに、他のメンバーに加入の可否決定を委ねるパターンである。

7. 考 察

本論では、分析にあたり、今回観察された遊戯活動に参加していたメンバーが、そもそも対象とし得る遊戯集団の体裁を持っているかという問題があった。この問題に関しては、平成14年度中には6年生男子児童Aを中心とした、固定的なメンバーが存在したことは既に述べた。また、年度が変わり、平成15年度になってからも、5年生の男子児童B、Cを中心としたメンバーが遊戯活動で、常にリーダーシップを発揮していた。また、2チームに分かれて実施されていた集団の遊戯活動は、組み分けから勝敗に対する態度までを含め、1つの集団としての性質を保持していた。このことから、今回調査した遊戯集団が、かなり組織化された集団であることが窺える。

以上のことから、今回の事例で調査した休憩時間中の遊戯活動のメンバーは、1つの遊戯集団として捉えることが可能と考えられる。そこで、この遊戯集団を、仲間集団の特徴とされた3つの観点、すなわち、自発的選択性、対等生、流動性から検討する。

第一に、集団のメンバー構成時に、自発的選択性が見られるかどうか、という点が検討され

ねばならない。この点に関しては、SやRなど、遊戯活動にあまり参加しない児童がいたことに加え、常に活動に参加している中心的メンバー（平成14年度のA、B、C、平成15年度のB、Cなど）と、条件によっては活動に参加しない周辺のメンバー（平成14年度のF、Gなど）が見られた。また、中心的メンバーであっても、選択された活動が自分の意に反していた場合、遊戯集団から抜ける場合があった。例えば、平成15年度は、教諭の介入によってベースボール型ゲーム以外の活動が実施されることになった場合、リーダーであるBが遊戯活動に参加しなかった。周辺のメンバーの参加の決定条件は、今回の調査では明らかにならなかったが、別の活動⁴⁶⁾をする空間や用具を見つけた場合、彼らはベースボール型ゲームに参加しなかった。これらの事例は、中心的メンバー、周辺のメンバーの双方が、活動への参加の有無を自発的に選択していたとことを示している。

第二に、メンバー相互の関係の対等性について検討する。この点に関しては、遊戯集団に所属する以前に、既に確立された社会的勢力の地位関係にはめ込まれているかどうかが問題になる。児童が技能や学年以外の社会的な地位関係を、遊戯活動内に持ち込むとすれば、本家・分家等、家族集団間の血縁等による地位構造が考えられる。この点について該当するのは、家どうしが親戚にあたるA、CのきょうだいとBとの関係であるが、この3者に遊戯活動中の特別な主従関係は認められなかった。他にも、EとKのきょうだいだが、希に遊戯集団内で一緒に活動することはあったが、学年差があったせいか、Eが在学中に3年生であったKが遊戯活動に参加する機会は少なかった。HとQ、Rも3人きょうだいであるが、一緒に活動することはなかった。

ただし、小学校の休憩時間では、集団の遊戯活動に教師が加わることがあり、教師と児童の関係は対等ではあり得ない。この場合、教師の介入の仕方が問題になる。平成14年度は、記録

を残す必要がないくらいに、ほぼ通年で、プラスチック製のバットとゴムのボールを使ったベースボール型ゲームが実施されていた。リーダーのAは、いち早く体育館に到着し、野球のベースやバット、ボール等を準備して場所を確保していた。その後、体育館にやってくるメンバー達の組み分けジャンケンの二人組を、Aが決めていた。活動中の紛争処理も最終的にはAの意見が尊重された。

しかし、平成15年度の教諭の介入は、なるべく多くの児童をメンバーに加えた中で、児童達に遊戯活動を実施させようという意図によるものであり、e教諭のみならず、s職員やt教諭がネットを張ってソフトバレーを提案し、低学年児童を参加させることがあった。ネットを挟んで対戦する活動は、身体接触が少ないため、技能差が少ないメンバー間でも、比較的安全に実施できる。また、s職員やt教諭は、バレーボールの経験があるので、技能的にも、メンバーの中で優位な位置にあった。この時、種目の選択に関われなかったBは、活動に参加しても、その後のルールの確認やメンバーの受け入れを担うことは皆無であった。また、e教諭がキックベースを提案した時は、リーダーのBが集団から離脱するケースもあった⁴⁷⁾。これらの事例から、種目の選択という、遊戯集団の参集目的に関わる事項は、その後の遊戯活動中におけるメンバー間の地位構造に影響を与えることが確認された。特に、平成14年度のAや平成15年度のBなどは、野球を得意とするリーダーであったため、野球以外の種目を教諭や職員などの大人から提示された場合は、その後にリーダーシップを発揮できず、集団の地位構造の頂点に立たなくなる。キックベースなどは、ベースボール型ゲームの1つと考えられるが、打撃時に足を使ってボールを蹴る行為は、野球よりサッカーの経験者のほうが有利である。Bがキックベースの活動から逸脱した事例は、Bが足を使ってボールを扱う種目内において、技能的に優位に

立っていないことを示している。つまり、遊戯集団のリーダーの技能的地位に影響を与えるような介入を、教諭や職員などの大人がした場合、メンバーの対等性は失われる。

第三に、遊戯集団のメンバーの流動性について検討する。今回対象とした遊戯集団は、平成14年度のAや、平成15年度のB、Cなどのように、組み分けや、活動中のもめ事に最終決定を下すリーダーが存在した。しかし、集団の役割はこれだけに留まらなかった。例えば、平成14年度のB、C、D、Eや、平成15年度のKなどは、集団のリーダーではなかったが、中途加入者が登場した際は、活動中のリーダーに「どちらのチーム？」などと声をかけることがあった。これら、受け入れ役割を担う者は、リーダー以外の中心的メンバーに相当する。そして、その周辺に、平成14年度のF、Gや、平成15年度のJやMなど、参加が一定でないメンバーが見られたので、小学校の休憩時間に発生する遊戯集団には、周辺のメンバーについて、仲間集団に見られるような⁴⁸⁾メンバーの流動性が見られた。

以上、仲間集団の3つの特徴である、メンバーの自発的選択性、対等性、流動性、について検討をした。しかし、一つ考慮すべき点がある。それは、集団の中にきょうだい関係のメンバーが含まれていることである⁴⁹⁾。この点に関しては、過疎地域で血縁関係者が多い小規模小学校を対象にした本調査では、自ずと限界があった。

今回の調査では、平成14年度に関しては、きょうだい関係のメンバーが中心になって中核的な交友集団を形成するという集団形成プロセスが見られた。遊戯集団内の中核的メンバーは、組み分け、種目選択やメンバーの受け入れ等、遊戯集団が活動するための役割を主に担うことから、各種の決定にこの種の血縁関係が影響している可能性も視野に入れて分析する必要がある。今回の調査では、きょうだい関係者が異なるチームに配属された場合、きょうだい

関係は遠慮がないためであろうか、罵り合いや喧嘩が激化する場合が希にあった。その場合、他のメンバーが、「きょうだいは同じチームにしなければだめだ」などと発言することがあった。しかし、兄、弟という血縁上の上下関係が、遊戯集団内の命令・服従として現れる事例はなかった。

8. 結 論

本論は、学校という限定的な場の休憩時間に発生する遊戯集団が、児童の社会化や健全な発達を促進する可能性を持つかどうかを検討した。児童の社会化を促進する集団の1つとしては、仲間集団があり、メンバーの活動参加への自発的選択性、メンバー間の対等性、参加メンバーの流動性がその条件とされている。

今回対象としたK小学校の遊戯集団は、AやB等、リーダーをはじめとする中心的メンバーから、FやG、Iなど周辺のメンバーに至るまで、活動への自発的選択性が見られた。リーダーを中核とする中心的メンバーは、自分達で活動を選択するのが常であり、今回はリーダーのAやBが技能において優位にたてるベースボール型ゲームが選択されていた。そのため、教諭の介入により活動種目が変更されたり、自分達が技能的に優位にたてる種目以外の種目が提案されたりすると、その時点で活動への不参加を選択する場合があった。周辺のメンバーは、中心的メンバーと異なる卓球などの活動をするなどの自発的選択性を見せた。

メンバー間の対等性については、家族どうしが血縁関係にあるA、CとBとの関わりが注目されたが、3者の間にはそうした家柄に起因すると思われる命令・服従等の関係が見られず、逆に技能や学年が低いBやCが、平成14年度のリーダーであるAに対して遊戯活動を提案するなど、対等に接している様子があった。しかし、教諭や職員等、大人が活動に加わり、活動中のルールの確認や、メンバーの確保等を教諭

らが中心として行うなどリーダーの集団内での地位を脅かす介入があると、キックベースにおけるBの例のように、リーダー自身がメンバーから逸脱したり、平成15年度における遊戯活動では、表3に示したように、低学年児童の活動への参加が多くなるなど、集団は対等性を失い、大人を中心とした遊戯集団に変化した。このように、関係が対等でないメンバーの出現は、遊戯集団に大きな影響を及ぼすことが明らかになった。

K小学校の遊戯集団では、参加メンバーの流動性も見られた。例えば、自発的選択性の部分でも述べたが、平成14年度のFやGは、ベースボール型ゲームより卓球を好むメンバーであり、事実、中学校に入学後、卓球部に入部した。平成15年度のベースボール型ゲームに注目しても、IやM、O、Qなどの参加が一定ではない。これら周辺のメンバーの存在が、メンバーを流動的にしていた。

以上のように、今回事例として取り上げたK小学校の遊戯集団は、児童の社会化に寄与する仲間集団と見なすに必要な条件を備えていると考えられる。リーダーを中心にした最終決定による集団の統括と、リーダー以外の中心的メンバーによる参加者の調達は、シンプルではあるが、この集団の規範となり、メンバーの社会化に寄与しているといえる。しかし、学校内での遊戯集団は、教師や職員等、児童とは立場の異なるメンバーが加わるケースがあり、仲間集団の性質が、著しく失われる可能性があることが留意すべき点である。

本論は、小規模小学校を対象としたために、主に、異年齢遊戯集団に対する考察がなされた。今後は、より児童数の多い小学校を対象とした、同年齢遊戯集団に関する検討が課題となろう。また、小学校の休憩時間に発生する遊戯集団の活動の特殊性についても、さらに詳細な検討をしたい。

謝 辞

本論を執筆するにあたり、実質二年間という長期に渡る参与観察を快く引き受けてくださったK小学校の校長先生をはじめ、学級への受け入れまでも許可くださったe先生、教職員の皆様、K小学校の全校児童の皆様、保護者の皆様、そしてK地区近隣の皆様に厚く御礼申し上げます。

註および引用参考文献

- 1) Parsons, T. and Bales, R.F. (1956). *Family: Socialization and Interaction Process*. Routledge and Kegan Paul. p. 114 (橋爪貞雄他訳. T・パーソンズ, R・F・バールズ著 (1981). 家族. 黎明書房, 名古屋). なお, Parsons はfamily, peer group, schoolという用語を使用しているので, それぞれを家族, 仲間集団, 学校と直訳しても差し支えないし, 橋爪による邦訳でもそのようになっていく. しかし本論は住田正樹 (2000). 子どもの仲間集団の研究. 九州大学出版会, 福岡, に多くを負っていることから, 住田の語法にしたがって用語を統一した.
- 2) 住田 (2000). 上掲書. p. 9.
- 3) 文部科学省では, 平成11年度から13年度までの3年間に地域で子どもを育てる環境の整備に着手, 「全国子どもプラン (緊急3ヶ年戦略)」を実施した. そしてこの実績を踏まえ, 平成14年度から, 学校週5日制にあわせて「新子どもプラン」を策定, 実施している. さらに, 平成16年度から同省は, 「地域の体験活動等の体制整備・情報提供」, 「子どもを核とした地域の様々な活動の機会と場の拡大」, 「家庭教育に関する相談体制の充実と学習機会の提供等」を柱とした主要施策を発表している. 平成16年度文部科学白書, 第1部, 第1章, 第3節参照.
- 4) 住田 (2000). 前掲書. p. 8.
- 5) 住田正樹, 高島秀樹 (2002). 子どもの発

達と現代社会・教育社会学講義. 北樹出版. 東京. pp. 61-62.

- 6) 住田によれば, 学校の中で発生する集団は, あらゆる面で学校や教師の管理下, 統率下におかれるため, 厳密には仲間集団とは異なるとされる. 学級集団の中で形成される子どものインフォーマルな下位集団も仲間集団とは異なるとされる. 住田 (2000). 前掲書. pp. 27-28.
- 7) 今回調査したK小学校以外で, 同N県I市の小規模N小学校と, やや規模が大きいN県J市のM小学校でも調査を実施しているが, 休憩時間に遊戯活動に参加している教師の姿は一度も見なかった.
- 8) 今回の遊戯集団の事例では, 結果的に男児の血縁関係者のみが対象になった. よって, 漢字表記の「兄弟」も可能であるが, 近年の社会学, 人類学の慣例に従い, 兄弟, 姉弟, 兄妹等も含めた一般的な表記法としてひらがなを用いている. 調査対象のK小学校の場合G (男子), N (女子), X (男子) はきょうだいである.
- 9) 例えば, 次の文献を参照されたい.
三宅茂夫 (2002). 幼稚園における持続的遊び集団の相互作用過程—バールズの相互作用過程分析をととして—. 教育実践学論集. 第3号. pp. 15-28. 荻田知則 (2004). なぜ子どもは「隠れる」のか?: 幼稚園における自由遊びの参与観察. 発達心理学研究. 15-2. pp. 140-149. 畠山美穂, 山崎晃 (2003). 幼児の攻撃・拒否の行動と保育者の対応に関する研究: 参与観察を通して得られたいじめの実態. 発達心理学研究. 第14巻. 第3号. pp. 284-293. 畠山美穂, 畠山 寛, 山崎 晃 (2003). 仲間と関われない幼児はどのように社会的スキルを学習するか?. 保育学研究. 第41巻. 第1号. pp. 20-28. 中川三和, 山崎 晃 (2004). 幼児の対人葛藤が遊びに与える

- 影響. 幼年教育研究年報. 第26巻. pp. 61-68. 池上貴美子, 近藤亜矢 (2005). 幼児期の遊び場面における定型的やり取りの発達過程. 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編). 第53号. pp. 191-206. Corsaro, W, A. (2003). *We're friends, right?: Inside kid's culture*. Joseph Henry Press. Washington, D. C. Corsaro, W, A. (1985). *Friendship and peer culture in the early years*. Ablex Publishing. Westport. CT.
- 10) 大前 衛 (2004). 子どもの遊びと社会性の発達序論. 湊川短期大学紀要. 第40巻. pp. 67-73. あるいは, 大段員美 (1972). 子どもの遊戯社会. タイムズ社. 大阪, や, 浅井浅一 (1967). 運動遊戯集団の構造と機能—小集団と人間関係—. 日本辞書. 大阪, がある. この2つの研究は, 実験的手法を採っているが, 集団のリーダーシップ機能やメンバーの社会的順位等, 集団の捉え方に関して示唆に富んでいる. また, Mead, G, H. (1967). *Mind, Self, & Society from the standpoint of a Social Behaviorist* (Paper back edition). The University of Chicago Press. Chicago, pp. 152-164, などもある. Meadは特に幼児期, 児童期という区別をせず, 遊び (play, 『ごっこ遊び』) が集団化・組織化されていく中で, 子どもが, 「一般化された他者 (the generalized other)」の役割をとりながら自我を形成すると考えた.
- 11) 渡辺広人, 松崎展也, 佐藤公代 (2004). 児童の仲間集団形成に及ぼす遊びの役割—調査法の試み—. 愛媛大学教育学部紀要 (体育科学). 第50巻. 第2号. pp. 73-81.
- 12) 山崎功一, 赤神 誠, 稲田俊治, 神家一成 (2004). 子どもの遊びと運動に関する基礎的研究(1). 高知大学教育学部研究報告. 第64号. pp. 125-131.
- 13) 横山 卓 (2004). 子ども—の遊びと友人観—小学生の場合. 共栄学園短期大学研究紀要. 第20号. pp. 139-151.
- 14) 住田 (2000). 前掲書. p. 18.
- 15) 住田 (2000). 前掲書. pp. 20-23.
- 16) 例えば, 住田は, 事例を調査する場合, 「原則として, 2回以上の観察の場合には複数の成員から, 発見時の1回だけの観察の場合にはリーダー的な成員を含む複数の成員から, 得られた場合には仲間集団のデーターとして採用することにした」としている (住田 (2000). 前掲書. p. 105). しかし, 現実の仲間集団には様々な目的で参集しているメンバーが混在していると考えられる. そのため, 参集目的を尋ねて, 全員一致した場合をタイプ別に分類したのか, 過半数以上なのかなど, 実際のタイプ分けの際にどのような手続きをしたのかに興味を持たれる. しかし, この点に関して, 住田の著書には「複数の成員から」とされるのみで, 基準はやや曖昧である.
- 17) この点に関しても, 住田は, 活動集団の中核には交友集団が存在することを認めている. したがって, 活動集団の中には交友集団が伏在することになり, この二種類のタイプが仲間集団の分類として適当であるかどうかの疑問も残るのである. 以下の住田の見解を参照されたい.
- 「ある一つの交友集団が核になり仲間を呼び集めて活動集団を形成したり, あるはいくつかの交友集団が集まって活動集団を形成しているようである」 (住田正樹「子どもと仲間集団」. 麻生誠, 木原孝博編著 (1985). 子どもはどう育つか. 有信堂. 東京. p. 95). あるいは, 「活動集団は集団目的となる集団的遊戯活動を提案し呼びかけて成員を呼び集めるようなリーダーシップをとる個人ないし集団を必要とする. だから活動集団形成の契機は多くはない. このリーダーシップをとるのは個人に限らず集団の場合もある. 交友集団である. 交友

- 集団が呼びかけて他の交友集団が集合するという形の活動集団もある」(住田 (2000), 前掲書, p. 107).
- 18) 渡邊義行, 古田敦子 (2001). 小学校における昼休みの運動遊びに関する調査研究. 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学). 第26巻. 第1号. pp. 73-78.
- 19) 福岡真理子, 戸田須恵子, 明神もと子 (2000). 小学生のストレスと休憩時間の過ごし方との関係に関する一考察. 釧路論集. 第32号. pp. 187-198.
- 20) 例えば, 次の文献を参照されたい.
Kraft, Robert E. (1989). Children at play; Behavior of Children at Recess. *The Journal of Physical Education, Recreation & Dance*. 60 (4). pp. 21-24. Hovell, Melbourne F. et al. (1978). An Evaluation of Elementary Students' Voluntary Physical Activity During Recess. *Research Quarterly*. 49 (4). pp. 460-474.
- 21) Pellegrini, A. D., Smith, Peter K. (1993). School Recess: Implications for Education and Development. *Review of Educational Research*. 63 (1). pp. 51-67.
- 22) Pellegrini, A. D., Huberty, Patti Davis., Jones, Ithel. (1995). The Effects of Recess Timing on Children's Playground and Classroom Behaviors. *American Educational Research Journal*. 32 (4). pp. 845-864.
- 23) Ladd, G. W and Price, J.M. (1993). Playstyles of Peer - Accepted and Peer - Rejected Children on the playground. Hart, C, H. (Eds.). *Children on Playgrounds Research Perspectives and Applications*. State University of New York Press. New York. pp. 130-161.
- 24) 例えば, 次の文献を参照されたい.
Jarrett, Olga S. et al. (1998). Impact of Recess on Classroom Behavior: Group Effects and Individual Differences. *The Journal of Educational Research*. 92 (2). pp. 121-126. Pellegrini, A. D. and Dvis, Parricia D. (1993). Relations between children's playground and classroom behavior. *British Journal of Education Psychology*. 63. pp. 88-95.
- 25) Kraft. (1989). op. cit. pp. 21-24.
- 26) 第1回訪問は平成14年4月19日, 最終日は平成15年11月10日である.
- 27) 平成15年5月28日のフィールドノーツによると, Aの自宅からK小学校までは, 筆者の徒歩で34分という距離であった. 生活道路は高低のある1本道なので, 自転車で移動しても児童達が交流するには決して近くはない距離である. 事実, 保護者に車で送ってもらえる時に限って, 同級生と遊ぶという児童もいた. 以下, フィールドノーツ: 学区でもっとも遠いN地区から通学しているBくん (5年), Cくん (5年) の民家の近くにK川に降りていく道があるので, 川縁の空き地に車を止めて学校まで歩く~中略~ほとんど人に会わない. 天気は晴, 気温は25度近くあり, かなり暑い. 前に話を聞いていたとおり, C君とB君の家には木製のデッキがついているのを確認. 以前, Bから「自宅からは25分くらい」と聞いていたが, 今回は33分57秒かかった.
- 28) 単に「フィールドワーク」とも呼ばれる.
- 29) 研究対象を小学校にしたため, 以下「子ども」という表記を「児童」に統一する.
- 30) 箕浦康子編著 (1999). フィールドワークの技法と実際. ミネルヴァ書房. 京都. pp. 42-55.
- 31) メンバーの中には, 打撃において, どの方向に投球や打球をするかを自分で制御できる者がいた. また, 技能の低い児童は, 投球, 打球共に自身で制御ができない. 調査者は, 投球, 打球ともに, 強度の調節はかろうじて可能であるが, 球の方向に関してはほとんど制御ができない. よって本論では中程度の技能と表記した.

- 32) 対象校のe教諭の話に基づく。また、どの曜日に訪問しても、児童達は、ほぼ毎日同じようなメンバーで活動していた。
- 33) 本論では、自発的に集団形成過程に加わっている場合を中心的、その他のケースを周辺的と呼ぶことにする。集団形成過程とは、集団の活動決定、メンバーの勧誘までを指すこととする。
- 34) 児童達は、調査者が大学の教員であることは知っているが、どのような講義を担当し、何の目的で小学校に来ているかは詳しくは知らず、また、それほど興味も示さなかった。調査をはじめて1年2ヶ月経ったある日に、初めて、大学で何を教える先生なのかと聞かれた。児童達からは様々な憶測が出たが、はっきり回答する必要もなく会話は次の話題に移行した。
- 35) 佐藤の用語法によると、調査地で見聞きしたことを書きとめた帳面をフィールドノート（野帳）とし、調査地での見聞きした内容についてのメモや記録を、敢えて複数形のフィールドノーツとして区別している。本論においても、現場での出来事を書きとめたメモを、裏付けを取るなどして修正・蓄積したデーターを主に使用しているので、フィールドノーツとした。佐藤（2002）。前掲書。p. x.
- 36) この場合のリーダーとは、活動中の様々な選択状況に最終決定する役割を指している。
- 37) 平成14年度中の主とした遊戯活動は、ベースボール型ゲームであり、Aは常に早く体育館に来てベースボール型ゲームの準備をしていた。平成15年度はベースボール型ゲームに加え、ソフトバレー、サッカー等も実施された。
- 38) 平成15年9月3日（水）、e教諭からのメール：「Cちゃんはポジティブにいろんな遊びを、そのレベルで楽しめるのですが、Bちゃんは、昨年のレベル・内容が忘れられないようです。Bちゃんを含めて、より大勢で楽しく遊ぶにはどうしたらよいかが私の課題です」。この頃は、大勢で楽しく遊べる種目選択にe教諭が介入していることが伺える。
- 39) Bのベースボール型ゲーム中の態度については、以下の記録がある。平成15年6月9日（月）のフィールドノーツ：「Bは野球となると態度が高圧的になる」。平成15年9月3日（水）のフィールドノーツ：「13:36にBが『このあと俺が全部ピッチャーやる！』と宣言し、後、投手はBが行う」。
- 40) 住田（2000）。前掲書。p. 148.
- 41) 平成15年7月23日（火）のフィールドノーツ：「Bはあまり気乗りしないようすだった～中略～Bはサッカーの時は少し控えめで、私に対しても高圧的なことをあまり言わない」（文中の「私」は調査者を指す。以下、同様）。また、同年9月11日（木）のフィールドノーツでは：「Bはあきらかに動きが悪くなる。人数が少ないと途端にやる気がなくなる」、など、サッカー型ゲームが実施されている時のBの態度に積極性はみられない。
- 42) 2人組でジャンケンのグーとパーだけを出し合う「グーパー」ジャンケンが実施されていた。
- 43) 平成14年度のメンバー内では、ほぼ例外なく、Aがジャンケンペアを決定していた。一方、平成15年度のメンバー内では、5年生男子児童のBとCがジャンケンペアを決定していた。以下、平成15年6月5日（木）のフィールドノーツ：「組み分けはジャンケン。私はいつものようにe先生と。ジャンケンで誰と誰を組ませるか、主にBとCが決定する」。
- 44) 今回の調査校の他に、N県J市郊外の工業団地内にある、各学年単式2学級のM小学校も調査しているが、組み分けの2人組

ジャンケンは見られず、集まったメンバー全員で一斉にメンバーを二分する方法が採られている。

- 45) K小学校と同様に、N県山間部に位置するN小学校にて調査を実施した。N小学校は低学年（1，2年），中学年（3，4年），高学年（5，6年）各1学級ずつ，合計3学級の複式であった。調査は平成17年10月からで，平成18年度現在も継続中。平成17年度は，高学年の学級が，5年生男子5名，女子2名，6年生は男子6名，女子2名，学級全体では15名であった。休憩時間中の集団的遊戯活動は，主に学級内の10名ほどがメンバーとなっていた。
- 46) 平成14年度の場合，FとGは卓球をする場合があった。卓球は卓球台を出すので場所を取るため，それほど頻繁に実施されなかった。体育館では，今回対象とした遊戯集団の他に，低学年児童による竹馬，一輪車，縄跳び等の遊戯集団があり，混雑する

ことが多かった。そのため，卓球台を設置する場所を確保する事は，困難であった。この2名は，卒業後，中学校で卓球部に入学した。

- 47) 平成15年6月2日のフィールドノーツによると，BとCが当初軟式野球大のボールでベースボール型ゲームを準備していたにもかかわらず，e教諭がボールの危険度を考慮したために，当初より柔らかめのボールを用意してキックベースを提案した。しかしBはこれを拒否して集団から離脱している。
- 48) この点は住田の見解と一致している。住田，高島（2002）。前掲書。p. 62。
- 49) 住田（2000）。前掲書。p. 105参照。住田は，遊戯集団の中にきょうだい関係のメンバーがいた場合は，すべて対象から除外している。なぜなら，きょうだいが含まれると，仲間集団の規模や年齢構成，性別構成が異なってくるからとされている。

受付 2006年7月7日

受理 2007年8月7日